

見慣れた風景。見慣れていた風景。

子供の頃よく見ていた、よく使っていた家具や調度品の数々。

パパと、ママと、大きな女神様の絵画。

その全てが、燃えていた。

真っ赤な炎が全てを包み、燃やしていく。

大柄の誰かが、パパとママを刺している。斬りつけている。

そしてどこから現れたのか……おおひみち狼男が近寄り、手を伸ばしてくる。

そして、目が覚める。

いつもの夢。それはいつもの夢だった。月原は額に手を当てながら、荒い息をゆつくりとゆつくりと整えていく。そして最後に大きく息を吐き出す。室内にはほんのりと甘い香りがする……リラックス出来るようにと時折焚くアロマテラピーお香の香りだ。そういえば、心を落ち着かせようとしてこのアロマテラピーお香を焚く日に限って、いつもの夢を見ているような気がする。なんとも皮肉なことだと月原は心中で苦笑するが、むろん表情は変わらない。

月原はベッドから足を下ろし、顔を上げまた大きく息を吐く。そしてあの夢についてぼんやりと考える。

何度も見てきた夢。鮮明なようで、肝心なところがぼやけている、象徴的な夢だ。

両親と暮らしていた家が燃え、両親が何者かに殺され、そして唐突に現れる狼男。全てのパーツは切り取られているかのように独立しており、同時に現れたとしても、なにか違和感を感じるような……たとえて言うなら、風景写真の上にイラスト集から切り取った人物画を載せて見るような、そんな違和感。パーツは動いているのに、全てが動画のように繋がって見えることはない。

この夢は、あの日……両親が殺された日に私が見た光景……の、はず。月原はそう説明を受けている。

月原自身は、事件当日のことは何も覚えていない。それはあまりにも衝撃的な出来事に、心がその記憶を封じてしまったのだろうと医者は説明していた……らしい。事件当時には心神的なケアという配慮からか直接聞かされたことはなかったが、後になって一種の記憶喪失だと知った。知らされた。

その封じられた記憶を夢としてみるようになったのは、中学に上がり、ここ聖パトリック女学園に通ってからだ。そして初めて、両親の敵討ちを心に誓った……月原は自身自身に言い聞かせるように、先ほど見た夢のことを説明し、落ち着きを取り戻そうとしていた。夢を見た後はいつでも、軽い興奮状態に陥ってしまう。月原は数え切れないほど経験した、この高揚しながらも気怠さけだるを感じる状況をどう落ち着かせるべきかを心得ていた。

今日は満月の日。狼男が街に現れる日。どうやら当日になって気分が高まっていたのだろう。だからこそアロマテラピーお香を焚き落ち着こうとしたのだが……どうやら逆効果だった様子。月原はいつもの夢を見た原因をそう片付けた。

七年。両親が殺されてから、七年という時が経過した。それから四年、両親の敵かたきを先ほどの夢で知ることが出来、敵を討つために槍の扱い方を学んだ。今まで実戦経験はなかったが、同胞との手合わせではそこそこ成果を上げてしていると慢心していたが……初めての实戦で、初めての敗北を味わった。屈辱的なあの夜を忘れぬよう、今日までさらなる修練を積んできたつもりだ。

今夜こそは……月原はベッドから立ち上がり、汗だくになった寝間着に手をかけ始めていた。

研修開始から五日目ともなれば、大上も学園内になじんでいる頃。登校時や廊下ですれ違う時などに、生徒達とも気軽に挨拶や簡単な会話などをするようになっていた。ただ大上は、挨拶などをする生徒が複数だった場合、決まって大上から数歩離れるとクスクスと笑い出す生徒が多いのを気にしていた。これは……やはり月原との噂が広まっているためだろうか？ そうだとすると、あまり良い状況とは言えないだろう。先日も広まった噂を耳にした四方よちに聞いただされたばかり。これに関しては結果として良い方へと転んだが、別のどこかで悪い結果を既に生じているかもしれない。もっとハードボイルドに行くべきだったか……大上は少し誤った方向に反省をしていた。

もう一つ誤っていることがあるとすると……生徒達の笑い声は、なにも噂のことばかりではない。格好良い異性イケてると言葉を交わすだけでも、年頃の少女は気持ちが高揚してしまうもので、すぐ側に友達がいれば一緒になってはしゃいでしまうのは無理からぬ事だろう。そのような少女の気持ちに全く鈍感なようでは、ハードボイルドは務まらない。

「そういえば、大上神父。最近一人の生徒と親密に会っているとか……」
これがかもしたら悪い結果なのか。大上はとうとう学園長の口から噂のことを聞いただされ、焦っている。

「ええ、高等部一年の月原さんと。偶然教会を清掃している彼女に会いましたね、学園の様子を少し伺いましたら、次の日にはファイルまで用意して熱心に話をしてくれまして。いや、おかげで助かっております」

冷静に、冷静に、ハードボイルドに。大上は自分にそう言い聞かせながら、事前に用意していた言い訳わけをスラスラと語り出した。

いつか聞かれるだろう。相手が学園長か他の先生かは特定できなくとも、四方から追求があった時点で予見はしていた大上。故に彼は、その時のために説明という名の言い訳を準備していた。彼の言葉に嘘はなく、実際月原は熱心に語ってくれていた。むしろそれだけで終わってはいないが、そこまで話す必要はないし、話せるわけもない。

「ああ、なるほど。そうですね……彼女は校内でも有名な生徒でしてね、何事にも熱心に取り組む良い生徒なんです」

上手く誤魔化しまかせた。少なくとも大上はそう確信した。表面上の説明だけだが、大上の言葉だけで説明としては十分だったはず。学園長が言うように月原は学園内で有名な生徒で、彼女が何事にも熱心なのは周知の事実。ならばある程度までの真実を語れば、それ以後は相手が勝手に納得してくれるだろう。その計算目論見はキツチリと的を射てくれた。

ただ問題があるとすれば……相手が学園長だと言うこと。

これまでの調べで、学園長と月原との間には浅からぬ繋がりがあることを突き止めている。四方の言葉を借りれば、月原の「実質的な保護者」である学園長が、さて大上の言葉をそのまま受け取ってくれるのか……。

「ですが気をつけてくださいよ、大上神父。あなたにやましい事が無いと私は信じていますが、今学園内で妙な噂になっていますから」

「どうやら軽い注意で流すようだ。大上は心中で安堵の溜息をつきながら、反省の言葉を口にする。

「そのようですね。いや、大変申し訳ありません」

反省の言葉は口になっているが、月原との関係はまだまだ続くだろう。

ただ今夜は、違った関係への転化になるかもしれない。どう転ぶかは全く予測できないが……願わくば、良い関係を築けますように。

満月の夜は、刻一刻と近づいていく……。

天然の毛皮にトレンチコートを羽織る。防寒としては充分な格好なのだが、やはり寒空の下に長時間身を晒していると多少震えもする。風がさして強くないのが救いだ、大上は腕組みをして僅かな防寒効果を得ようとしていた。

誰もいない深夜のオフィス街、その裏道。初めて月原と出会った場所。大上はその場所が一望できるビルの屋上から見下ろしていた。

今夜、月原はここを訪れるだろう。それは確信していた大上だったが、気がかりなことがあった。故に彼は以前のようにわざと姿をさらすような事は避けた。

はたして、月原は一人で来るだろうか？

月原は武闘派グノーシス主義に属している修道女^{シスター}。ならば同胞に報告はしているだろうし、確実に敵^{かたき}を仕留めるならその同胞達に助力を願い出て当然。そう考えると、むしろ月原一人で来るとは考えにくい。それならそれで、異端教団^{カルト}の規模や他にどのような者がいるのかを確認できる為、大上にとつて悪い事態とは言えない。そこで大上は集団で来ることを踏まえ、へたに姿をさらして多数を相手に乱戦という事態にならないよう、ビルの屋上から観察という方法を選んでいた。

しかし、出来れば月原一人で来て欲しい。そう大上は切に願った。

最終的な目標は異端教団^{カルト}ではあるが、今大上の脳裏に浮かぶのは月原のことばかり。彼女をいかにして救い出すか、そればかりを考えている。

らしくないな。それはカウンターハンターとしていかなものかと、大上は自分を責める。がしかし、責めきれないのは相手が自分自身だからか。大上はビルの上から現場を見下ろしながら、長い口の端をつり上げていた。ハードボイルドに行こうぜ、ハードボイルドに。そう何度か自分に言い聞かせたが、あまりうまくはいかない。

程なくして……月原はやって来た。布にくるまれた長い棒のような……おそらく槍だろう……それを片手に持ち、もう片方の手はコートの襟をつかみ、コートの前がはだけないように気を遣っている。全身を包むコートの下は、おそらく尼僧服だろう。さすがに尼僧服のまま街中は歩けまい。

周囲を注意深く見渡す月原。間違いなく大上……が正体だとは知らない^{ウェア・ウルフ}狼男を探している。そしてターゲットとなつている大上から見て、月原の他に人影は見えていない。一人で来たのだろうか？ 他の仲間と手分けして探している可能性もあるが、少なくとも彼女の周囲に人影は見あたらない。彼女一人で来たとしても、他に仲間がいるとしても、接触するなら今しかない。大上はビルの屋上から、跳んだ。

人ならば即死するだろう高さからトレンチコートをなびかせ急降下するその姿は、まる

でSFXを駆使したハリウッド映画さながら。ストン、と軽やかに月原の背後へ着地した大上を、月明かりが彼の後方よりスポットライトのように照らしている。

ハードボイルドらしい、見事な登場だ。大上は自分に酔い始めていた。地面に向けられた視線をゆつくり上げ、月原へ顔を向ける。そして格好良く台詞を決めれば完璧だ。

「よ……うおお！」

口からは決め台詞とはほど遠い、間抜けな叫び声が飛び出した。

槍にくるまれていた布を取り払い、着ていたコートを手早く脱ぎ捨て、月原は「狼男」を見るやすすぐさま戦闘態勢に入っていた。素早い一突きは見事だったが、すんでの所でかわされた。

「ちよっ、落ち着け。まずははな……っとお！」

月原に「敵」の声を聞く耳など持ち合わせてはいない。ただただ、前回の雪辱をはらし見事に敵を討つ事しか頭にない。月原は何度も何度も、狼男へ槍を突き出していく。

当然月原が素直に話を聞くことは無いだろうと思っていた大上ではあったが、台詞の一つも言わせてもらえぬほどとまでは考えていなかった。しかしそれでもどうにか槍をかわし、鞘から刀を抜き取る。

「積極的なのはベッドの上だけに……て、ゴメン、嘘、「冗談！」

ちよっとしたお茶目は、むしろ月原を怒らせるだけ。より厳しくなった攻撃を、大上は刀を駆使して受け止める。

確かに大上の余計な一言も月原を激昂させた要因ではあるが、それだけではない。減らず口を叩きながらも全ての突きをかかわされ、受け流されている。その現実、力量の差が、月原をますます苛立たせていた。

一方大上としては、月原を激怒させるのも一つの作戦であった。このままでは一言も聞く気は無いだろう月原に、強引にでも話を聞かせるためには、疲れさせ、士気を剥ぎ、無理矢理にでも聞く姿勢を整えさせるしかない。

幸いにも……と言うべきか迷うところだが、月原の戦闘技術はさほど高いものではないのは、大上にとつて救いだ。ずいぶんと訓練を受けているであろう事は、手合わせした感触として感じるが、しかし経験不足は否めない。例えるなら、プロを相手に部活動レベルで挑むようなものか。

月原の戦闘レベルが異端教団全体のレベルに対する指標となるかは定かではないが、この程度ならハンターとしては三流、良くても二流の集団と言わざるを得ない。

……さてよ？ 大上は槍先を弾きながら一つの疑問にぶち当たった。

カウンターハンターは、不当な狩りを行うハンターを逆に退治するのが仕事。大上はハンターを誘い出す為に身を晒し、そしてそれに食らいついたのが月原だった。だからこそ月原をハンターの一員とし、彼女が所属する教団をハンター集団だとして調査を開始したわけだが……その推測は正しかったのか？

月原の腕前は、どう良く見積もってもハンターと呼べるレベルではない。敵討ちを口にしてはいるが、おそらくまだ一度も魔物を手にかけてことはないだろう。そんな月原に槍の技術を教え込んでるのは教団の誰かなのだろうが、本人の資質以前にあまりきちんとした指導も訓練も出来ていないように思える。とすれば、異端教団自体が月原同様未熟な技術しか持ち合わせていない烏合の衆なのではないか？

しかしそれとは別に、月原が口にする両親の敵^{かたき}や学園長の過去など、あからさまに怪しい点もたくさんある。何より、腕はともかく月原は本気で大上を刺し殺そうと必死なのだから、実はただのマニア集団でした……といった冗談ではないのは確かだ。

いずれにせよ、月原には話を聞いてもらい、出来れば話を聞き出したい。徐々に槍先が下がり気味になり月原の方が大きく揺れ始めている今が、頃合いと見て良さそうだ。大上はそう確信し、次の行動へと移し始める。

突き出される槍をまず斜め下へ弾き流し、大上は一步前へと踏み込む。月原が槍につられるように若干前のめりになったところで、肩を軽く押す。するとバランスを崩した月原は転倒しそうになるのをどうにか立て直そうと足を踏ん張り槍から片手を放してしまう。その機を逃さず、大上は槍をつかみ強く引つ張る。そうして月原は槍を奪われ、同時に首筋に刀の冷たさを僅かに感じる状況に陥ることとなった。

「今日は殺したらどうだ、なんて言わないでくれよ？」

余裕の言葉に、月原はただ目を細め相手を睨み返すことしかできなかった。

「……なあ、キミは何を根拠に^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}を両親の敵^{かたき}だと思っただけ狙う？」

質問に対する返答があるとは想定していなかった大上。僅かだけ答えを待ったが、やはり返ってくるのは憎しみのこもった視線だけ。大上は少しわざとらしく溜息をつき、話を続けることにした。

「悪いとは思ったが、キミのことを少し調べさせてもらったよ。月原恵美さん」

細めていた目蓋が見開く。この状況で自分のフルネームを呼ばれば、誰だっけと驚くだろう。それは当然月原も例外ではない。

「ご両親が殺害されたのは事実のようだね。しかしそれが^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}の仕業だと何故言えるんだい？ まして放火まであつて証拠らしい証拠は何も残ってないと聞いたが……」

可能性のある証拠は、月原本人が現場を見ていた場合だが……彼女は記憶を無くしていると大上は聞いている。もし記憶を取り戻しているのならそれを確認したいが、はたして彼女はどう出るのか……。

「……お前達は、敵^{かたき}だ……」

やはりか。大上はまた溜息をついた。

これ以上の質問は無駄だろうと諦め、大上は……やはりこちらも無駄になるかもしれない説得へと話を切り替える。

「前にも話したが……キミの両親を殺したのが^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}だとしても、それは俺と同一人物か？ ^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}なら全てが敵^{かたき}だつてのは乱暴すぎるだろう。まして魔物は全員が邪悪だつて決めつけるのな」

大上が言っていることは正論だ。しかしだからといってそれを素直に聞き入れるのは、魔物の存在自体が信じられない人間にとってはとても難しい事。まして^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}を憎んでいる月原なら尚更だ。それは判っている大上だが、根気よく説得を続けていく。

「俺はカウンターハンターってのをやっている。不当な狩りを続けるハンターを懲らしめるのが仕事だ。例えば、今のキミとかね」

睨む眼光はなおも鋭いが、ひるむことなく大上は口を動かし続けた。

「キミの話が本当なら、キミの敵^{かたき}は俺の標的にもなり得る。俺は別に、人間を全て狩りだそうなんて思っちゃいない。不当に魔物を狙うハンターも、不当に人間を惨殺する魔物

も、俺にとってでは全てが標的。善悪の区別は付けている……キミはどうだい？」

善悪の区別は付けているだろう。魔物は、ウヘア・ウルフ狼男は全てが悪だと区別しているのだから。しかしそれは一方的な価値観であり、誤りである。

そもそも月原にとってのおおかみおとし狼男は野蛮で野性的で、荒々しい魔物をイメージしていた。しかし初めて巡り会ったウヘア・ウルフ狼男は全くイメージとは異なり、トレンチコートなどを羽織って格好を付け、道具まで使う文明的な姿を見せている。そしてあろう事か人間に説教を始めるとは。自分の常識、価値観が崩壊し始めている月原は、その崩壊と共に少しずつ大上の言葉を理解しようとしている。その一方で、何故かたき敵の言葉に耳を傾けると警告を促す自分もいる。

両親の敵を討つ為に訓練を続け、実在するかどうかも疑わしかったおおかみおとし狼男を探し続け、そしてようやく見つけ出したウヘア・ウルフ狼男は正論を唱えてくる。何を基準に何を判断すればいいのか、今の月原に指標などあるはずもない。

端的に言えば、月原は混乱していた。

その混乱は正論という説得を、月原にとってのの七年間を全て否定する言葉へと変えてしまふ魔力が宿っていた。

「お前は……敵だ……」

そう結論づけるのが、もっとも楽で、判りやすい結論。受け入れてしまえば、月原にとってこれは正義になり得る。

そう、人間は楽な方を選ぶ傾向にある。混沌とした今の世に、明確な正義や悪は定義付けが難しい。しかし正義と悪と、二極で物事を考える方が楽だから、人々は簡単に、手っ取り早く、善悪を明確にしたがる。自分の中にある正義という物差しだけで。だからこそ、今月原が下した結論に異論を唱えることなど誰が出来ようか？

出来る。そうつぶやいたのは、他ならぬ月原の心。

「敵なんだ……敵なんだ……」

口ではそうつぶやきながら、心の片隅でその定義づけに異論を唱えていた。

正論は正論だ。ウヘア・ウルフ狼男が言うように、何故彼が両親の敵だと言える？ 証拠など無い

に等しいではないか。

いやしかし、この男はおおかみおとし狼男だ。そもそも邪悪な魔物を退治して何が悪い？

何故邪悪だと言い切れる？ だいたい、本当に両親の敵はおおかみおとし狼男なのか？

え？ 自問自答の中で、月原は奇妙な疑問を今更感じ始めた。

両親を殺したのはおおかみおとし狼男。それはあの夢が私の記憶なのだから……そう言い訳を自分に語りかけながら、おかしな事に気付く。確かに、夢におおかみおとし狼男は登場する。しかし両親を斬りつけたのは……誰？ 何故夢に出ただけのおおかみおとし狼男を犯人だと？ だって、夢でパパとママを斬りつけたのは……あれ？

何故？

あれ？

何故？

おかしい……おかしい……何故、なんで、なんで、私、なんで、私、だって、そう言うから……犯人はおおかみおとし狼男 だって言うから……誰が？

「いや、だって……そう言うから……犯人は魔物だって……だって……」

「ん？ どうした、おい大丈夫か！」

明らかに様子がおかしくなった月原に、大上は刀も槍も落とし肩をつかみながら呼びかけた。常に無表情だった少女の顔は狼狽し、讒言のように意味不明なことをつぶやき続けている。

何が起きた？ 月原の心中で行われていた葛藤と混乱を知るよしもない大上は、慌てた。少女の身体を揺さぶり、叫び、正気呼び戻そうとするがうまくいかない。

もはや説得どころではない。何が少女の中で起きているのかは全く予測できないが、自分の説得が引き金になったのは確か。大上は自信も混乱しながら、それでも月原の正気を呼び戻そうと必死だ。

必死に揺さぶっていたからだろうか。大上は月原の肩がじんわりと熱くなってきたのに気付いた。発熱？ 月原は突然の熱病に冒されたともいうのか？ それでも大上はしっかりと月原の肩をつかみ、何度も何度も呼びかける。

「いや、いやっ！」

しかしそれを月原本人が拒絶し、大上の手を乱暴に払いのける。慌てて駆け寄る大上の手を無闇に振り回す手で叩き、一歩二歩と後ずさる。

「誰？ 誰？ 私……パパ、ママ……いや、いやっ！ やめてえ！」

月原の絶叫。その天をも突き抜かんばかりの大声と共に、空へと立ち上る真っ赤な光源。

「なっ……」

大上はあまりの光景に、言葉を詰まらせた。

炎。月原の全身を赤々と炎が包み込んでいる。その勢いは激しく、まさに火柱と化していた。

「まずい！」

何が起こったのか。それは大上にも月原本人にも判らない。判るのは、この状況は全てものを悪化させるに過ぎないということ。

炎をどうにかしなければ。大上は急ぎ着ていたトレンチコートを脱ぎ、それで月原を包み込み、抱きしめた。

大上が着ていたトレンチコートは、蜘蛛女アルケニーの糸で作られた特注品。あらゆる厄災から身を守る効果があり、それは当然防火も含まれる。

「落ち着け、月原、落ち着け、大丈夫だから！」

自身の体毛が焦げる異臭に咽せそうになりながら、大上はまた何度も呼びかける。流石はレディウェブのブランド物。コート自体は一切燃えることなく、鎮火に一役買っていた。しかし炎自体が月原を熱源にしているためか、完全な鎮火には至らない。

「私……私……」

大上がコート越しに月原と接触し声をかけ続ける。それが鎮火へと自体を導いたのか。月原が徐々に正気を取り戻すと、炎はそれに反比例して鎮火していく。

「大丈夫か？」

大上は月原を抱きしめたまま声をかけ、ゆっくりと頭を撫でた。

「はい……」

声は完全に普段の月原……大上が知る、学園での月原に戻っていた。

状況を理解するのに、月原は僅かな時間を要した。その間、月原は黙って狼男ウェア・ウルフに抱

きしめられ頭を撫でられている。

敵を討とうと狼男に迫り、反撃され、説教され、そして……混乱して……抱きめられている。状況を整理しても、今何故こうなっているかという事に対し戸惑いはある。あるが……何故か悪い気はしなかった。

自分が混乱に陥った事。そして自分の身体が突然燃え上がった事。その事実はしっかりと覚えている。その内容も。だが今それを思い返すことは状況を蒸し返すことになりそうで、月原はひとまず拒絶した。

今彼女に出来ること。まずは一言声をかけることだった。

「あの……もう、大丈夫ですから……」

言われて、大上は自分がずっと抱きしめたままだったことを思い返し、慌てて彼女を腕から解放した。と同時に、ちらりと月原を見て、そして慌てて後ろを振り返る。

「その、なんだ……コートは返さないで良いから、しっかりと着込んだ方が……」
言われて月原は自分の状況をもう一つ確認した。

裸だ。着ていた尼僧服は燃え尽き、トレンチコートだけを軽く掛けられている姿。月原は表情を変えず、しかし頬だけは炎のように赤く染め、言われたとおり大きすぎるトレンチコートに袖を通ししっかりと前を手で押さえる。

「一つだけ確認させてくれ」後ろを向いたまま、大上は尋ねた。「さっきのは……キミも初めてのことが？」

「……はい」

月原は初めて、ウヘア・ウルフ狼男の質問に対し素直に答えた。

「そうか……キミ自身も色々と困惑しているのだろう。今日はこれくらいにしようか」
本音を言えば、聞きたいことはいくらでもある。しかし今それを尋ねられる状況ではない。なにより、月原自身が心配だ。今はあらゆる状況から解放してあげるのが得策。

「しばらく……俺の言ったことを考えてみてくれ。それでも俺を敵だと言うなら……いや……いずれにしても、また近いうちに会おう」

振り返ることなく、大上はそのまま場を後にしようとして歩きだし、数歩目からは大きな跳躍に変えビルとビルの狭間に消えていった。

月原はただその背中を見つめ見送った。姿が消えた後もしばらく。

自分は……何者なのだろうか？ これまで築き上げてきた自分の中にある様々な物が音を立て崩壊していくのを、月明かりの下で実感していた。

「バツカじゃないの、アンタ。どーして半裸の女の子をその場に置いて行けるのよ！」

大切なトレンチコートを無くした言い訳も含め、大上が妖精学者の館で先ほどの一件を語ったところ、同席していた蜘蛛女が激怒した。自分の作品を紛失された事ももちろん彼女にとって腹立たしい報告なのだが、それ以上に大上の女性に対する配慮の無さが彼女の逆鱗に触れていた。

確かに月原をあの場に残したのは良い対処とは言えなかったが、しかしだからといって大上が狼の姿で送っていくわけにもいかず、当然人間の姿になることも出来ず、偶然を装って第三者に接触させるのも、月原の羞恥心を刺激してしまうので望ましいとは言い難く

……対処が難しいケースだったのは事実だろう。そこで大上は一度離れた後に遠くから見守りつつ帰宅できるまで無事を確認するという方法をとったのだが……考えられる最善策だったかもしれないが、大上には一つ大きな配慮が欠けていた。

「どうして自分の服を脱いで渡さないのよ！ トレンチコートだけって、まるでどっかの変態みたいじゃないの！」

そもそも狼の姿になった大上は、裸の方が自然な姿に見えるだろう。だったら自分の服を渡すくらいの配慮は確かに欲しいところ。その事に言われて気付いた大上は、あまりにハードボイルドらしからぬ対応だったと落ち込んでいた。加えて、今彼は反省を促す意味でアルケニーに正座を強制されている。全裸で。

「まあ、そのくらいにしといてやれって……だいぶ反省しているようだし」

顔も肩も耳も尻尾も下げ、シユンとなった大上に館の主がフォローを入れた。

「まったく……いつも言ってるでしょ、もっと女性の扱いを学びなさいって。それでよくハードボイルドを気取れるわね」

キツイ一言に、より丸く小さくなる大上。だがひとまずこれで気が済んだのか、アルケニーは溜息を最後に口を閉ざした。

「さて……」話題を切り替えるために一呼吸置いてから、天道寺は顎に手を当てながら語り出す。「発火能力か……ますますオカルト方面に傾き始めたな」

月原の身に起こった奇つ怪な事実。本人も全く予知していなかった能力の発動に、誰もが首をかしげていた。

「チャコ、彼女の血筋は何か特別な家系か何かなのか？」

天道寺はあらかじめ招集を呼びかけていた、月原の身の上に関しては一番詳しい四方に話を振る。本人が自覚していなかった能力ということは、何らかの儀式や修行を行ったわけではないだろうと推測出来る。となれば、いわゆる「潜在能力」の発動ということなのだろうが、そうなる原因は血筋などに関わるのでは……そう天道寺は答えを導いた。三流小説などに見られがちな話だが、しかし現実として潜在能力は発動され、そして考えられる原因は定番通りだが特別な家系しか思いつかない。

天道寺の言葉を受け、四方は目を瞑りしばらく考え込んだ。それは月原の家系図を脳裏に浮かべる為の沈黙というわけではなく、どう伝えるべきかを思索しているが為の沈黙だった。

「……彼女の祖母は、我らが女神ブリージットの加護を受けられたケルト人です」

四方の言葉に驚いたのは、天道寺とメイドの、妖精を良く知る二人だけだった。場の反応を予見していた四方は、そのまま詳しい説明に入った。

「ケルト人とは、アイルランドやイギリスなどヨーロッパの一部地方で栄えた民族です。しかし他の民族に攻め滅ぼされて途絶えた……事になっています」

途絶えたと言っても根絶やしに抹殺されたわけではないため、当然ケルト人の血は他民族と混ざり合う形で引き継がれている。単純に民族という形では滅んだというだけの話だ。

「そのケルト人達が崇拜した神々の中に、女神ブリージットもいたわけですが……」

「えっ、でもチャコちゃんの修道院ってキリスト教の修道院じゃないの？」

説明の途中で、角川が口を挟んだ。その疑問に四方は丁寧な解説を始める。

「表向きはそうになっています。女神ブリージットへの信仰や文化はアイルランドに

根強く残っていたのですが、そこへ宣教師として訪れたパトリックがその信仰や文化を追い出す代わりに取り込むことで布教しました。そしてブリージットはケルト人の女神からキリスト教の聖女へと姿を変え信仰されるようになりました」

「聖パトリック女学園とブリージット女子修道院に深い繋がりがあるのは、こういう歴史背景があつてなんだよ」

四方の解説を補足するように天道寺が言葉を足した。

「ですから、表向きブリージット女子修道院はキリスト教の修道院として活動しています。しかし我らの修道院は密かに、女神ブリージットを崇拜し続けています……そのような意味において考えると、私達も異端教団と言われておかしくはないのですが」

僅かに自嘲気味な笑みが四方からこぼれた。異端教団と言うと聞こえは悪いが、しかし異端の全てが悪というわけではなく、当然四方たちの修道院は怪しげな教団ではけして無い。それはこの場にいる全員がよく判っていること。

「話を戻します……月原さんの祖母は純粋なケルト人ではありませんでしたが、女神の加護を受けながら信仰とケルト人の文化を引き継がれていました。しかし結婚を機にその役目を終えています。娘さん、つまり月原さんの母親は女神への信仰こそされていましたが、一信徒という立場でしかありませんでした」

そして月原本人は祖母から母親へと流れてきた自分の生い立ちをまだ知らされていないかつたはずだと、四方は付け加える。

「月原さんの祖母は女神の加護こそ受けてらしたのですが、特別な力を持っていたとは伺っておりませんし、おそらくそのような事実もなかったと思います。ですから何故月原さんにそのような力があったのか……考えられるとすれば……」

「ブリージットの加護か。かの女神が司っていたのは……火と竈かまどだったな」

ここでようやく、天道寺が驚いていた訳を他の者達が理解した。一致したキーワードに、今更ながら今度は大上達が驚く。

「いやでも……じゃあなんで今更彼女に？」

大上の疑問には、誰も答えられない。月原自身はブリージットを崇拜していたわけではなく、むしろ全く別の異端教団カルトに身を置きながら、しかも本人は「信仰心はない」と公言している。そんな彼女に女神の加護が受けられるのか？

誰もが疑問符をいくつも頭上に並べる中、アイリンが静かに話を切り出し始める。

「……問題はむしろ、彼女がその発火能力バイロキネシスを発動するきっかけだと思うのですが。ケンの話では、説得を試みた途中から混乱し始めていたようだというのですが……何故そこで混乱し始めたのが気になります」

アイリンは一度言葉を切り、自分の推理を再び披露し始める。

「混乱の原因は……というよりも、ケンはこの話しかしていないと思いますが……敵かたきの定義が曖昧になったことから生じていると思われます。そもそも当時の記憶がない彼女が、どうして両親の敵を狼男ウルフだと断定するようになったのか……それはおそらく、彼女が関わる異端教団カルトが関与しているのは間違いありません。ではどのような方法で、異端教団は彼女に両親の敵を狼男ウルフだと思わせることが出来たのでしょうか？」

メイドの言葉を待たずして、おおよその見当は皆付け始めていた。そして全員の見解を代表して、アイリンがその言葉を紡ぎ出す。

「その手段は、彼女を混乱に陥おちいらせるような方法を用いたとしか考えられません。となれば、その方法は……催眠術のような、何らかの記憶操作ではないかと」

場は静まりかえっているが、全員の意見が一致しているのはその静かな空気が皆に伝えている。

「そついやあの学園長、オカルト方面ばかりじゃなく催眠術とかにも興味を示していたらしいな……そつちか、そつちで繋がったか……」

自分が仕入れた小さな情報が実を結んだ瞬間、天道寺は独り言のようにつぶやいた。しかし実は結んだが、その実が結局なんなのか、そこまでには至らない。歯がゆさばかりが残るのみ。

「……あのさ。」角川にしては珍しく、遠慮がちに口を開く。「学園長がエミりん(;)に催眠術をかけたとしたら……なんで？ 洗脳して自分の仲間にするため？」

角川が感じた疑問は場の誰もが持つており、そして誰も答えを求め、そして尋ねた角川も含め皆同じ推測をしていた。その答えを、代表して大上が口にする。

「それもあるだろうが……もう一つ、証拠隠滅という目的もあっただろう。月原さんは両親殺害当時の記憶がないとはいえ、何時思い出してもおかしくはない状態だったはず。ならそのままよりは、記憶を上書きして完全に封じ込めた方が安心だと考えた……」

それはつまり、月原の両親を殺したのは学園長だと、皆が推理しているということが前提。そしてこの推理に誰も異論は唱えない。

もしこの推理が正しかったとすると……月原にとって本当の両親の敵は、彼女が所属する異端教団カルトの代表者で今現在彼女の実質的な保護者である学園長ということになる。それは様々な意味で、とても危険な関係だろう。

月原の腕前は今一つで、実践的なハンターとは呼べないものではあったが……推理が正しければ……少なくとも異端教団カルトの長は人を二人殺していることになる。ならばカウントーハンターとしてとても見過ごせない。大上は改めて、今回の一件を無事解決しなければと心に誓う。

「……明日もう一度あの学園長を洗い直してみるか。ケン、お前は どうする？ 明日は学園休みだろ」

大上は天道寺に尋ねられるまでもなく、明日の行動を心に決めていた。

ふと窓の外を眺める。そこには大きな満月。無事に帰宅したのは見届けたが、本当に大丈夫だろうか？ 大上はただ、彼女の身を案じるのみだった。

大上の心配をよそに、月原は彼が心配するよりも前に無事帰宅し、既にトレンチコートを脱ぎ服に袖を通していた。

替えの尼僧服に。

そして月原は今薄暗い礼拝堂の中で、両手を胸の前で握り瞳を閉じ、静かに祈りを捧げていた。いや……祈りを捧げるふりをしていた。

アレは何だったのだらうか。突然自分の身体から炎が噴き出した、あの現象は。その事ばかりが頭の中を駆けめぐり、グノーシス主義が信仰する神アインへ祈りを捧げる余裕などどこにもなかった。

そもそも月原は、真剣に神を信じ祈りを捧げたことなど一度たりとも無かった。復讐を。ただその事ばかりが彼女の心を占めていた。

そんな彼女の心に、大きな変化が訪れようとしている。いやもう、訪れている。

礼拝堂では教壇に立つ異端教団カルトの教祖的な代表……木宮司教が信者達に話を言って聞かせている。信者達は熱心に耳を傾け司教の言葉を聞いているが、唯一月原の耳には全く届いていない。信仰心がないことを自覚している月原だったが、話そのものはいつも聞いていた。聞きながら、復讐の心を忘れないうように常に努めていた。それなのに、月原はその努めも放棄している。

私は……本当に復讐をしたいのだろうか？ ふと湧き上がった疑問。そんなことを僅かでも感じた自分に驚き、そしてほんの僅かだったその疑問が急速に膨らんでいくことにまた驚いている。こんな疑問、一度だつて考えたこともないのに、何故今になって。疑問を感じたことに疑問を持ち始めた月原は、これまでの自分を振り返り始めた。

両親が亡くなった事への悲しみ。そして失っている当時の記憶に対する不安。それは今でも持ち続けている。しかし復讐を果たそうなどと考え始めたのは何時から？ それは両親の敵かたきを初めて知ったときから……おおかみおとし狼男おおかみおとしの存在を知ってから。その狼男おおかみおとしは実在し、これで敵かたきが討てると信じていた。しかしあの男は、信じてきたものをことごとく打ち崩し、そして……炎が身体を包んだ。

そうか……月原は一つのことと思いがたつた。グツグツと煮えたぎっていた復讐心が薄れたのは、炎に包まれてからだ。まるで煮詰まっていた復讐心が炎と共に全て放出されてしまったかのよう。

それだけではない。あれだけ拒絶していた……初めておおかみおとし狼男おおかみおとしと出会ってから頑かたくなに拒絶していた彼の言葉が、今は素直に受け止められる。この心境の変化はいったい何故起きたのか？ 自分の身に起きたことが炎の噴出という奇跡まじなだけでない事に、月原は改めて驚いていた。

何が起き、何が変わったのだろうか。月原はじつと、それを何度も何度も自分に問いかけていた。

「どうかしましたか？ シスター月原」

声を掛けられ、月原は意識を現実へと引き戻された。ふと辺りを見回すと、信者達が腰を上げ帰り始めている。どうやら集会が終わったことにも気付かぬほど、自問自答に没頭していたらしい。

「いえ……なんでも……」

何でもない訳がない。それは本人にも声を掛けた木宮にも判りきっている。しかし月原はこう答えるより他になかった。

「あの、木宮司教……」

自らは引き出せなかった答えを、月原は司教から……失った過去を見せてくれた司教から得ようと問いかけた。

「何故、私の敵かたきを探す手伝いをしてくださらなかったのですか？」

司教は一度、月原の目撃報告を信者達の前で公表した。いよいよ我らの敵が現れた、と。しかしそれから、度々集会の時にその話題は持ち出すものの、具体的な搜索をしようとはしなかった。今日のこと、満月だから現れるはずだと進言したにもかかわらず、司教は

特に何もしなかった。

「言っているでしょう？ シスター月原。全ては神アイオーンの導きのままに。また時が来ればあなたの敵かたきにきつと出会えます。ですから今は、心乱さず待ちなさい」

月原の口ぶりから、木宮は狼男ウエア・ウルフとの接触がなかったものと早合点している。それは月原も感じたが、正そうとはしなかった。今日彼に出会えたことは黙っていた方が良さそうだ。何故かそう月原は判断した。

「私が差し上げたお香アロマテラピーは毎晩使っていますか？ どうやら今日は興奮し心も信仰も乱れている様子。あのお香アロマテラピーを焚いて、今夜はゆっくりお休みなさい」

にこやかに告げ、木宮は場を後にした。月原は司教の背を礼拝堂から見えなくなるまで見送っている。

お香アロマテラピー……月原は思い当たった。あのお香アロマテラピーを焚く度に、あの夢ドリームを見ていること。そして同時に、復讐心をかき立てられることを。

鬱積うつせきしていた復讐心が薄らいだ今、月原は司教が渡してくるお香アロマテラピーに怪しさを覚えた。

そういえば……毎晩焚くようにと言いつけられながらも、滅多に使う気になれなかったのは、本能が無意識に警告を発していたからかもしれない。今ならそれを実感できる。なぜならば、既にあのお香アロマテラピーを焚く気になれない自分がそこにいるから。

初めて、月原は木宮司教という男に何らかの疑いを向け始めていた。